様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：３４４３１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３８０８３１

研究課題名（和文）独立型社会福祉士の特性と現状にもとづくより効果的なスーパービジョン方法の開発

研究課題名（英文）Establishment of More Effective Supervision Method Based on Characteristic and Status of Independent Social Workers

研究代表者
御前　由美子（Misaki, Yumiko）

関西福祉科学大学・社会福祉学部・講師

研究者番号：６０６１５１１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：ソーシャルワーカーの専門性を高めるためにはスーパービジョンが欠かせない。独立型社会福祉士のスーパービジョンにおける課題を整理すると、セルフ・スーパービジョンが最も適していると推察された。そこで、太田義弘の提唱するエコシステム構想によるコンピュータ支援ツールを用い、独立型社会福祉士の協力を得て独立型社会福祉士のスーパービジョンのためのコンピュータ支援ツールを開発した。さらに、この支援ツールを4名の独立型社会福祉士と試行し、その有効性が示唆された。
独立型社会福祉士のソーシャルワーク実践の質を保証し、自律性の確保を可能にするセルフ・スーパービジョンの具体的な方法を提示することができた。

研究成果の概要（英文）：It has been said that supervision is an essential element to enhance the expertise of social workers. In this context, the identification work of the challenges in the supervision of independent social workers has indicated that self-supervision is the most suitable as the type of supervision for independent social workers. According to such result, with the use of a computer assistance tool based on the eco-system vison advocated by Yoshihiro Ota, a computer assistance tool useful for the supervision in the practice of independent social workers has been developed with the help of them. Further, a trial and validation of such assistance tool with four independent social workers suggests its effectiveness.
This study has succeeded in proposing a specific method of the self-supervision that assures the quality of social work practices of independent social workers and enables the securement of their autonomy.

研究分野：ソーシャルワーク

キーワード：独立型社会福祉士　スーパービジョン　支援ツール

１．研究開始当初の背景

近年、組織や機関から独立することで、制約にとらわれずに自由裁量性をいかしたソーシャルワーク実践を行う独立型社会福祉士の活動に期待が寄せられている。しかし、その社会的認知度や社会的地位の低さ、そしてその要因としての専門性の不明瞭さが指摘されている（太田・安井・小榮住：2010）。また、これまでの研究（科研費研究基盤Ｃ「ソーシャルワークの固有性にねざした独立型社会福祉士の開業システムの構築」平成 22 年、23 年、25 年）において、その研修内容を検討する必要のあることが明らかとなっている。

２．研究の目的

本研究では、独立型社会福祉士のソーシャルワーク実践の質を保証するとともに自立性の確保を可能にする方法について検討を行い、独立型社会福祉士が行うソーシャルワーク実践の専門性の向上をめざして、実践に対するスーパービジョンに活用可能なコンピュータ支援ツールを開発した。そして、この支援ツールを独立型社会福祉士との協働により試行し、検証することで、独立型社会福祉士の実践に対するスーパービジョンの具体的な方法を提示していくことを目的としている。

３．研究の方法

まず、独立型社会福祉士のソーシャルワーク実践および現任研修の状況やその内容、スーパービジョン体制、ニーズなどについての課題を把握した。そして、文献調査や独立型社会福祉士に対するインタビュー調査を実施し、現任研修の内容やスーパービジョン体制、スーパービジョン方法を整理した。共同研究者や協力者を交えた話し合いについては、合計 7 回行うことができ、そのなかで、独立型社会福祉士に関する研究を行っている研究者も加わった会合をもつことができた。これにより、独立型社会福祉士に関する同様の研究を行っている研究者にも協力を得られる体制となった。

独立型社会福祉士のスーパービジョンにコンピュータ支援ツールを活用しようと考えていたため、これを用いるにあたっての独立型社会福祉士ソーシャルワーク実践の特性を盛り込む必要があった。そこで、独立型社会福祉士の内容をこの支援ツールに盛り込むべき内容や質問項目について検討を重ねるとともに、独立型社会福祉士へのインタビューも実施した。

そして、全体を「経営」と「実践」に分け、「経営」を「事業展開」「「事業継続」に、「実践」を「価値・知識」「方策・方法」に分けることができた。さらに、「事業展開」は「事業内容」「成果実績」に、「事業継続」は「評価」「専門性」に、「価値・知識」は「価値倫理」と「知識」に、「方策」は、「方策」「方法」に分けることができた。そして、これらから 32 の構成子を選定し、構成子それぞれについての質問項目を作成することで、独立型社会福祉士スーパービジョン支援ツールを開発した。

さらに、この独立型社会福祉士スーパービジョン支援ツールを用いて、独立型社会福祉士のスーパービジョンの試行を行った。

スーパービジョンの試行方法としては、独立型社会福祉士 4 名とともに、開発した支援ツールへの入力と「SV シート①」（「独立開業してやりたかった実践」、「独立開業するに至った理由」、「今、取り組んでいる主な実践」、「現在の収支状況」）にもとづくインタビューと入力したデータ（「事業展開」「事業継続」「価値・方法」「知識・方策」）においてポイントの高い項目と低い項目を記入する「SV シート②」により振り返りを行った。

４．研究成果

（１）A 氏のレーダーチャートと分析

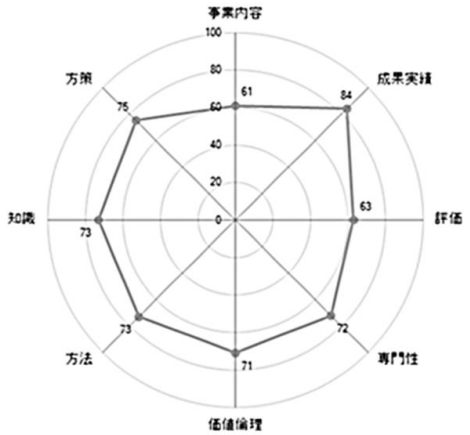

図１　A 氏 4 層目レーダーチャート

図２　A 氏　下位構成子レーダーチャート

A 氏自身の気づきは、以下のとおりである。

①「ケース数」「リスクマネジメント」：ケース数が多くなればなるほどリスクマネジメントについて対策しないといけないが全くしていないこと

②「リスクマネジメント」：雇用している社会福祉士（女性）が産休育休制度による休職をした際、代替できる相談員を準備していないこと、彼女の担当数 60 ケースをどうするのか考えていなかったこと
③「ストレスマネジメント」：雇用している社会福祉士の相談相手等ピアネットワークへの参画にむけた配慮がなかったこと
④「第三者評価」：現時点で評価指標も含めた仕組みが整備されていないこと
①「ケース数」「リスクマネジメント」に関して、a 氏は、ケース数は収入に直結するため十分に把握していたがケースが増えれば増えるだけリスクも増えていくということに関して全く考慮していなかったことに気づいた。また、その一環で②「リスクマネジメント」の具体的課題として、現在雇用する 30 代の社会福祉士（女性）が今後、産休育休制度による休職をした際、彼女の担当数 60 ケースをどうするのか考えていなかったこと、代替する相談員を確保するという発想がなく、漠然と今の状態で継続できるものと認識していたことに気づくことができた。また、③「ストレスマネジメント」において、自分自身は対処できているが、雇用する社会福祉士の相談相手がおらず、不安のなかで業務にあたっている可能性が高いという想像に行きつき、今後、彼女へのピアサポートに配慮する必要性を認識することができた。そして、④「第三者評価」の必要性は理解できるものの整備されていないという現実問題にも気づくことができた。
　そして、こうした明確になった問題点から今後の具体的対応策について次の点に言及していた。
①代替の社会福祉士を探す等アンテナを日ごろから立てておくこと
②スキルアップやピアカウンセリング等を個人任せにするのではなく、事務所として研修制度等のしくみを創ってピアネットワークへの参画を促すこと
　①について、A 独立型社会福祉士事務所は現在、赤字経営であるため、ケース数を減らし仕事を続けていくことは困難であるため、今後、代替社会福祉士を雇用することもあり得るという危機感をもちながら、事務所にあった社会福祉士がいないかアンテナを立てておく必要性が明らかとなった。また、②これまでの雇用される側であった公務員時代や、一人で仕事にあたっていた昨年と違い、今年から雇用主でもあるという自覚をもち、雇用する社員のこころのケアにも配慮する等、働き方への工夫やシステム整備が必要なことも明確となった。こうしたデータを介して客観的に自身の経営と実践を振り返り、日々の実践だけでは気づくことができなかった弱さや強みを明確に把握することができ、有意義であったと述べられていた。

（2）B 氏のレーダーチャートと分析

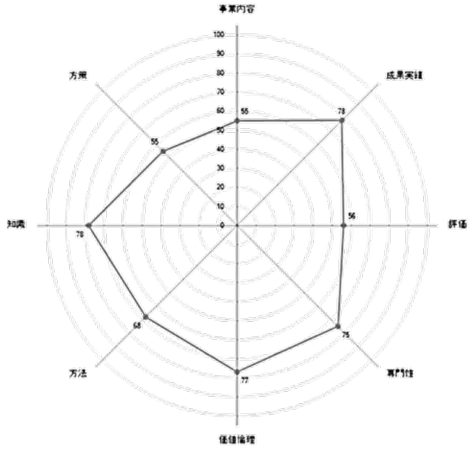

図 3　B 氏 4 層目レーダーチャート

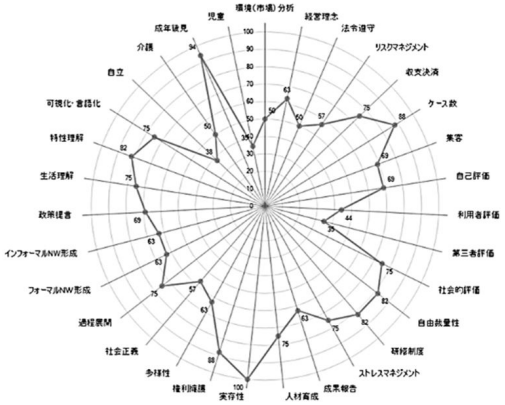

図 4　B 氏　下位構成子レーダーチャート

　B 氏自身の気づきは、以下のとおりである。
①「環境把握」：自宅という場所ありきでの独立開業のため地域に必要な支援を提供するという発想は皆無であった。
②「利用者評価」「第三者評価」：成年後見を利用する利用者のためコミュニケーションがとりにくく、第三者評価のしくみもないので他者評価をフィードバックする機会そのものがなかった
③「実存性」：こうした利用者特性に鑑み、利用者の実感を重視する実践を特に意識して心がけていることに気付くことができた。B 氏に経営と実践を振り返ってもらったところ、自宅開業が前提であり、且つ、この地域に必要な支援というよりも独立開業で生計がたつには成年後見制度による実践という発想であったため、ほぼ地域ニーズは考えていないこと、また、通信制で資格取得したため福祉ネットワークや知識も深くなかったことから社会福祉士会の研修制度を利用し知識を深め、ネットワークをひろげてきたという努力が明確化された。一方で、コミュニケーションがとりにくい利用者が多いこと、第三者評価のしくみもないので他者評価をフィードバックする機会そのものがなかったことに気づかれていた。しかし、評価指標がない代わりに、日々の実践では利用者の実

感や寄り添う実践、すなわち実存性を大切にしていることから、ノンバーバルな表現や何気ない会話から感謝されているとは思うと述べられていた。また、意識はしていなかったが自治会や寄合いへ参加するなどインフォーマルな付き合いから地域の認知度、広報活動へとつながっている可能性があることへも気づかれていた。
こうした明確になった問題点から今後の具体的対応策について次の点に言及していた。
①利用者からの評価をフィードバックする方法を早急に考え実行にうつすこと
②地元の地域アセスメントに基づく必要な社会資源としてのサービス創設という視点で今後の事業拡大を行うこと
　①について、コミュニケーションがとりにくい利用者からどのような方法で評価をもらうかという点が課題ではあるが、普段のコミュニケーションにおいて利用者から評価を頂くという視点で対話をする等工夫をしながら実行に移していくこと、②については、今後やってみたい実践として精神障害者支援の一環として居場所づくりをと考えていたが、地域ニーズの観点から、まずは地域アセスメントを実施することが明確となった。

（３）C 氏のレーダーチャートと分析

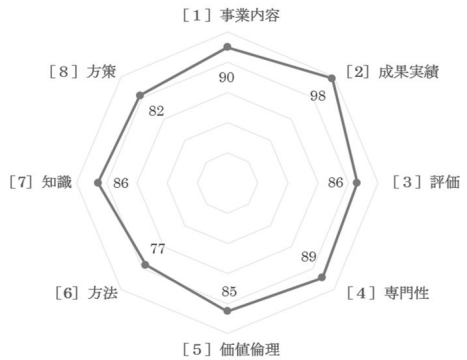

図５　C 氏 ４層目レーダーチャート

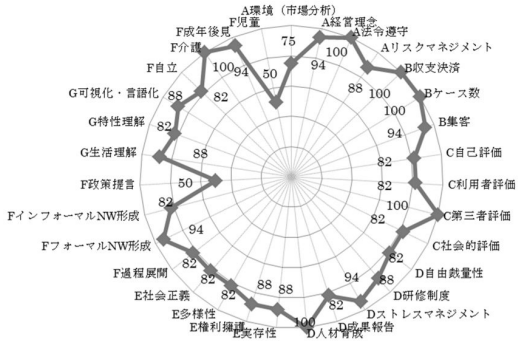

図６　C 氏　下位構成子レーダーチャート

　C 氏自身の気づきは、以下のとおりである。
①職場や業務との関連性
「成年後見業務と経営が主な仕事である。福祉に思いがある職員が集まっている職場であるため、業務上の質やリスク管理は継続に欠かせない大切な取り組みであると考えています。」
②資格との関連性
「社会福祉士として何ができるかを自問自答した結果、今に至ります。」
③その他
「政策提言についての活動ができていない現状がよく見えました。」
④ツールについて
「主観的な状況で選択したので、客観的な指標がみえるように改善する等も必要かと思います。」

（４）D 氏のレーダーチャートと分析

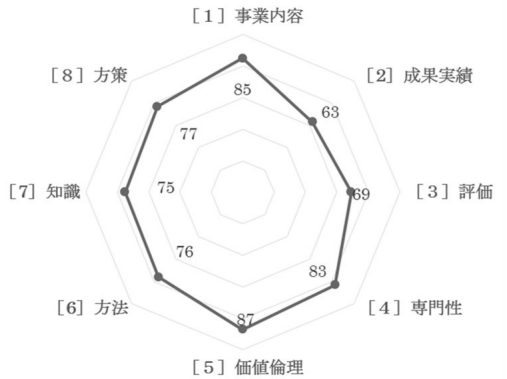

図７　D 氏 ４層目レーダーチャート

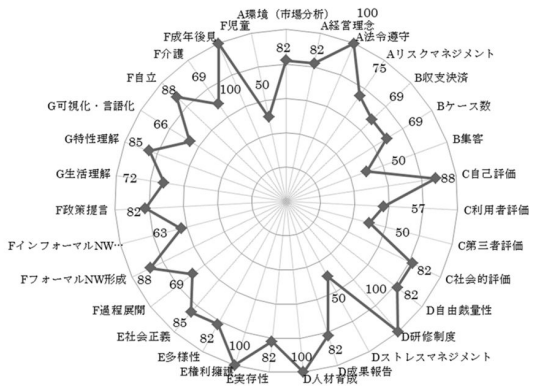

図８　D 氏　下位構成子レーダーチャート

　D 氏自身の気づきは、以下のとおりである。
①職場や業務との関連性
「専従者と２人の事業なので、ストレスはあまり感じません。」
②資格との関連性
「認定社会福祉士として人材育成をしていくことが大事だと思っている。」
③その他
「児童分野が弱点だと気づかされました。」
④ツールについて
「認定社会福祉士など『取得資格』についても、評価する項目がほしいです。」

このような結果から、エコシステム構想を援用した支援ツールを使った独立型社会福祉士へのセルフ・スーパービジョンの方法として、以下の5点について意義があると考える。
①可視化されたデータを介することで経営と実践を包括的に振り返ることができる。
②継続的実践を担保する経営面、実践面における問題や強みへの客観的評価が可能になる。
③開業当初に抱いていた「やりたかった実践」と「今、取り組む実践」との関連性が明確になり、漠然とした不安や焦りが軽減される。
④具体的な課題が分析できるため、具体的行動計画、改善計画がたてやすく、実際に次どのような動きをすればよいかが分かる。
⑤孤軍奮闘する独立型社会福祉士にとって本ツールによる評価は、継続的に評価でき、何をどう変えていけばよいか（変えてきたか）という変化も見えるため意義深い。

まず、①可視化されたデータを介することで経営と実践を包括的に振り返ることができ、現状の経営と実践が分断している研修制度や振り返り方法よりも独立型社会福祉士の特性を踏まえた振り返りが可能になっていると考えられる。

また、②日常の多忙さから断片的にしか経営、実践の課題を見つけることができなかったり、主観的な評価に陥ったりすることが少なくない独立型社会福祉士にとって、可視化されたデータを介することで客観的に自身の経営と実践を振り返ることが可能になったといえる。

さらに、③当初、もっと創意工夫にあふれた独立型ならではの実践をしたかったのに、現実は大学講師や成年後見制度のみを活用した事業内容で何をやっているのかわからなくなっていくといった独立型社会福祉士特有のジレンマの解消につながるという点で意義があると考える。開業当初に抱いていた「やりたかった実践」と「今、取り組む実践」との関連性が明確になり、今やっていることが当初の想いや収入面での理想とかけ離れているという漠然とした不安や焦りへの軽減につながり、目の前の事業や支援により収入を安定させることで、本来、やりたかった実践にトライできるという発想をもちながら仕事に取り組むことができるのではないだろうか。

そして、④具体的な課題が分析できるため、具体的行動計画、改善計画がたてやすく、実際に次どのような動きをすればよいかといった漠然とした考えや想いではなく、実際に何をしていけばよいかという課題が明確になると考える。

最後に、⑤孤軍奮闘する独立型社会福祉士にとって本ツールによるセルフ・スーパービジョンは、継続的にできること、また、何をどう変えていけばよいか（変えてきたか）という変化も見えるため、モニタリング機能にもなると考える。

以上のことから、本支援ツールを介したセルフ・スーパービジョン方法は、独立型社会福祉士にとって一定の意義ある方法としての可能性を見出すことができたと考える。

そこで、独立型社会福祉士のスーパービジョンは以下のような方法で行うことができる。
①独立開業した理由などを SV①シートに記入する。
②独立型社会福祉士のセルフ・スーパービジョン支援ツールにおける質問項目に入力する。
③支援ツール結果を表示し、視覚化する。
④グラフ化されたデータから、実践把握を行う。
⑤実践把握にもとづき、課題を分析する。
・2層のグラフデータから、「実践」と「経営」のバランスについて分析する。
・3層、4層、下位構成子のグラフデータから、ポイントの高い項目、低い項目、それぞれの項目について分析する。
⑥SV シート①を再度確認し、やりたかった実践と現状とのバランスも鑑み、今後の方策を検討する。

本研究では、支援ツールを用いたセルフ・スーパービジョン方法への提案を行ってきたが、構成子についてはさらなる精査が必要である。このため、今後は、選定した構成子や質問項目をコンピュータ支援ツールに入力したうえで、事例を使い、答えにくい質問項目や意味のとらえにくいものがないかなどの確認作業を行っていく必要がある。

今後の課題としては次の5点が挙げられる。
①セルフ・スーパービジョン方法の実証研究の積み重ね
②グループ・スーパービジョン方法への展開と実証研究の実施
③経営手腕、実践方法における各人の取り組みを可視化・普遍化
④独立型社会福祉士のイノベーション的実践の精緻化
⑤独立型社会福祉士の高度専門化

また、本研究ではセルフ・スーパービジョンに焦点をあてた研究を行ってきたが、独立型社会福祉士の役割をはたすことを可能にする要因として、セルフ・スーパービジョン力に加え、仲間の存在も重要であるとされている 。そこで、本支援ツールを用いて、独立型社会福祉士同士が行うピア・スーパービジョンにも活用できるのではないかと考えている。本支援ツールは、数値化したデータによりスーパービジョンを行うことから、離れた場所にいる社会福祉士同士がインターネットでつながり、セルフ・スーパービジョンをふまえたピア・スーパービジョンの実施も可能になるのではないだろうか。独立型社会福祉士がお互いにスーパービジョンを行うピア・スーパービジョン方法としても展開

していくことで、地域によって活発に実践事例報告やケース研究をする独立型社会福祉士にとっても意義ある方法にしていきたいと考える。

また、独立型社会福祉士個人の属人的な取り組みとしてケースを累積するのではなく、各人の取り組みを可視化し、普遍化することで、より多くの独立型社会福祉士を輩出する開業システムへと昇華すること、それは、独立型社会福祉士に期待される創意工夫のあるイノベーション的実践の精緻化につながり、既存の制度やしくみ、サービスではどうにもならない利用者の生活を支援する支援者として確立することにつながると考える。これこそが、独立型社会福祉士の高度専門化への入り口であり、求められる、期待されている姿ではないだろうか。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 6 件）

①御前由美子「独立型社会福祉士のためのスーパービジョン支援ツールの開発」『和歌山信愛女子短期大学紀要』第 56 号、2016 年、査読無し

②小榮住まゆ子「独立型社会福祉士の研修プログラム開発に関する研究―独立型社会福祉士へのインタビュー調査を踏まえて―」『人間関係学研究』（椙山女学園大学人間関係学部・大学院人間関係学研究科）第 14 号、2016 年、査読あり

③御前由美子「独立型社会福祉士のスーパービジョン方法を具体化する支援ツール」『地域ケアリング』第 18 巻 5 号、2016 年、査読無し

④小榮住 まゆ子「ソーシャルワーク実践アプローチの体系化にむけた研究 ： 支援過程に焦点化して」『人間関係学研究』（椙山女学園大学人間関係学部・大学院人間関係学研究科）第 15 号、2017 年、査読あり

⑤御前由美子「独立型社会福祉士のセルフ・スーパービジョンに関する一考察」『関西福祉科学大学紀要』第 21 号、2017 年、査読あり

⑥小榮住まゆ子「独立型社会福祉士のソーシャルワーク実践に対するセルフスーパービジョン方法に関する研究」『人間関係学研究』（椙山女学園大学人間関係学部・大学院人間関係学研究科）第 16 号、2018 年、査読あり

〔学会発表〕（計 4 件）

①小榮住まゆ子他「独立型社会福祉士の開業システムの構築をめぐる現状と課題」ソーシャルワーク学会　第 31 回大会 2014 年 6 月 22 日

②御前由美子他「独立型社会福祉士実践のためのスーパービジョン支援ツール」日本社会福祉学会　第63回秋季大会　2015年9月20日

③小榮住まゆ子他「独立型社会福祉士のソーシャルワーク実践に対するスーパービジョン方法の構築―エコシステム構想による支援ツール開発と試行―」日本ソーシャルワーク学会　第 34 回大会　2017 年 7 月 23 日

④御前由美子他「独立型社会福祉士のセルフ・スーパービジョンとピア・スーパービジョンの意義―スーパービジョンを困難にする要因の考察から―」日本社会福祉学会　第 65 回秋季大会　2017 年 10 月 22 日

〔図書〕（計 1 件）

①太田義弘・中村佐織・安井理夫編著『高度専門職業としてのソーシャルワーク』光生館、2017 年

- 御前由美子 pp.99-102,pp.153-158
- 安井理夫 pp.31-44, pp.71-75
- 小榮住まゆ子 pp.57-59, pp.61-70, pp.75-79
- 西内章 pp.135-139
- 伊藤佳代子 pp.106-109
- 溝渕淳 pp.142-145
- 長澤真由子 pp.103-106

６．研究組織

(1)研究代表者

御前　由美子（MISAKI Yumiko）
関西福祉科学大学・社会福祉学部・講師
研究者番号：(60615110)

(2)研究分担者

安井　理夫（YASUI Michio）
関西福祉科学大学・社会福祉学部・教授
研究者番号： 30329677

小榮住　まゆ子(KOEZUMI Mayuko)
椙山女学園大学・人間関係学部・准教授
研究者番号：60509206

西内　章(NISHIUCHI Akira)
高知県立大学・社会福祉学部・准教授
研究者番号：80364131

伊藤　佳代子(ITO Kayoko)
別府大学短期大学部・その他部局等・教授
研究者番号：10390361

溝渕　淳(MIZOBUCHI Jun)
広島文教女子大学・人間科学部・准教授
研究者番号：10368730

長澤　真由子(NAGASAWA Mayuko)
広島国際大学・医療福祉学部・准教授
研究者番号：20446024